

令和6年度 学習分析事業 課題改善シート 三原市立南小学校

【別紙1】

1 本年度の結果

①学力定着分析 NRT 偏差値平均

	2年	3年	4年	5年	6年	全体
国語	前年度結果 偏差値平均	52.7	52.7	51.9	52.4	52.4
	本年度結果 偏差値平均	51.1	51.4	50.6	52.1	50.3
算数	前年度結果 偏差値平均	53.4	53.4	54.3	52.1	53.3
	本年度結果 偏差値平均	51.9	51.9	54.4	55	52.4
理科	前年度結果 偏差値平均			52.7	50.3	51.5
	本年度結果 偏差値平均		50.2	51.4	47.7	49.8
全体	前年度結果 偏差値平均	53.1	53.1	52.7	51.5	52.6
	本年度結果 偏差値平均	51.5	51.7	51.7	52.8	50.1

②全国学力・学習状況調査 正答率平均

教科	国語	算数
前年度結果 (対県比)	63 (91)	62 (97)
本年度結果 (対県比)	68 (99)	67 (106)

2 令和5年度について

①調査から明らかになった課題

【年度当初の学力について】(NRTをうけて)	【年度当初の学力について】(全国学力・学習状況調査をうけて)
●国語では、「話すこと・聞くこと」領域において「話題に沿って話す」(4年/57%)、「計画的に話し合い考えをまとめる」(6年/55.8%)、「書くこと」領域において「書くことの順序を考える」(3年/13%)、「目的に応じて工夫して書く」(5年/37.4%)、「読むこと」領域において「文章を読み感想などを伝え合う」(2年/47.9%)に課題があった。	●国語科(情報の扱い方に関する事項の知識・技能)では、情報と情報の関連付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことに(48.2%)に課題があった。
●国語科(話すこと・聞くことの思考・判断・表現)では、目的や意図に応じ、話の内容を捉え、話し手の考え方と比較しながら、自分の考え方をまとめること(60.2%)に課題があった。	●国語科(話すこと・聞くことの思考・判断・表現)では、目的や意図に応じ、話の内容を捉え、話し手の考え方と比較しながら、自分の考え方をまとめること(60.2%)に課題があった。
●算数では、「数と計算」領域において「数の大小、最小の数」(2年/56%)、「式の読み取り」(3年/46%)、「分数のしきみ」(4年/36%)、「整数と小数の仕組み」(6年/79.5%)、「データの活用」領域において「表と折れ線グラフ」(5年/51.1%)に課題があった。	●算数科(変化と関係の知識・技能)では、筋道を立てて考え、言葉と式を関連付ける力、伴つて変わる2つの数量関係を理解すること(45.8%)に課題があった。
	●算数科(数と計算の思考・判断・表現)では、()を用いた式や、加法と乗法の混合した式を場面と関連づけて読み取ること(63.9%)に課題があった。

②課題改善に向けた学校組織全体の重点目標・取組

重点目標(何を、どの程度達成するか)	達成のための具体的取組(どのようにして)	スケジュール	検証の指標・目標
【授業改善を通した学力・学習意欲の向上】 (1)全教諭が「問い合わせる探究」を意識した授業を実施し、全学級の児童が多様な表現方法で考えることのできる授業づくり・授業改善を行う。 (2)全学級で、自分の言葉でまとめや振り返りが書けるようにする。 (3)「伸び」の実感と意欲向上を大切にした「やればできる検定」を核とした、基礎学力定着への取組を全校で実施する。	(1)(2) ①各学力調査(NRT、全国学力・学習状況調査)の誤答分析による実態把握と改善計画の立案 →全国比との差が顕著に表れている問題を解き、児童に必要な力や授業改善の視点で分析・交流を行う。 ②研究授業・研究協議を通じた「めざす授業」の共有(「改善・協議の柱」の焦点化、1人1回以上) →学年間で教科研究・授業公開をし、授業力向上に向けて意識改革を進める。 ③授業観察を1回継続的に実施し、全職員の授業力アップを目指す。 →参観シートを活用して参観、改善点を焦点化して振り返りを行なう。 (3) ①各単元導入時における「既習事項の学び直し」実施 (授業と家庭学習などを連動させた「学びの土台づくり」・チャレンジタイムでの前学年の復習・チャレンジタイムでの表現力の向上) ②計算「やればできる！」検定の定期的実施(苦手分野に焦点化を絞った反復練習) ③「ひいてねタイム」の実施 (低学年を対象に、四則計算や音読に困難さを抱えた児童を取り上げ、基礎学力の定着を図る)	(1) ① 6月・8月 ② 5月～2月 ③ 月1回 (2) ① 各単元前の家庭学習 チャレンジタイム週4回 ② 月2回 ③ 毎日(給食準備中)	・全児童の各単元末テスト平均値 (通過率80%以上の児童の割合80%) ・南小アンケート 「多様な表現方法で考えることができる」 (肯定的評価80%以上) ・計算検定合格率(80%以上)
【学級・学習集団づくり】 (1)全学級において「南小スタンダード」を徹底し安心安全な風土の醸成を図る。 (2)全学級において学習規律の徹底を図り、学級学年経営を基盤とした支持的風土の醸成を図る。	①Q-Uによる実態把握と改善計画の立案・共有 ②要支援群にいる児童(NRTとのクロス集計表のD、C-1に位置する児童)との面談実施・全職員による実態の共有 ③児童会による生活目標と学習目標の提示・各学級によるふり返りの実施 ④児童会・委員会活動、継割り活動を通じて6年生主体となる異学年交流の計画・実施 ⑤全職員対象に、自らの学級経営のこだわりを語る場を作る。	① 6月・8月 ② 9～10月 ③ 通年 ④ 通年 ⑤ 通年	・ハイバーQUテストにおける学級満足度の数値 (全国平均以上) ・自己有用感に係る児童アンケート 「自分にはよいところがある」「よさを友達に認められている」において肯定的評価(80%以上)

3 令和6年度について

①調査から明らかになった課題

【学力調査について】(NRTをうけて)
●国語では書くことの領域において「同音の漢字」(6年/37%)、「目的に応じて工夫して書く」(5年/37.5%)、「読み返してよいところを見つける」(2年/48.8%)に課題があった。
●算数では图形の領域において「2つの円周の差」(6年/30%)、图形領域において「二等辺三角形の構成要素」(4年/11%)、「三角形・四角形」(3年/60.1%)、「ものの形、ものの位置」(2年/73.9%)に課題があった。
(全国学力・学習状況調査をうけて)
●国語では、「書くこと」の思考判断表現では、「目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書く力」に課題があった。
●算数では、「データの活用」の思考判断表現では、「折れ線グラフから必要な数値を読み取り、条件に当てはまることを記述すること」に課題があった。

②課題改善に向けた学校組織全体の重点取組等

重点取組(上記課題を踏まえたもの)	具体的方策(継続して取り組めるもの)	検証指標及び時期
【学力向上について】 ・算数科における改善の視点を明確にした、子ども起点の授業づくり ・まとめた文章を書くこと ・四則計算の確実な定着	①深い授業研究に基づく「問い合わせる探究と解決、R80」を視点にした授業改善 ②教師用デジタル教科書の活用 ③既習事項の学び直しと個別目標を設定した繰り返し学習の継続 ④放課後学力補充とプリント等の直しを最後までやり切ること ⑤基礎学力の定着(2年生では、学級のくくりを外して習熟度別に5グループに分け、教職員を配置してくり上がり、くり下がり、九九の計算に取り組ませる) ⑥家庭学習の定着(児童会目標に設定し、全校で意識して取り組む)	OR80自校の評価基準C以上(各学期1回) ○単元末テスト(国・算)80%以上(8月・2月) ○「自分の考えを図・式・言葉などで友達に伝えることができた」と肯定的に回答する児童の割合80%以上(8月・2月児童アンケート)
【学級・学習集団づくりについて】 ・安心できる居場所づくり ・支持的風土の醸成	①「南小スタンダード」の徹底 ②生徒指導の4つの視点を生かした児童支援 ③認め合える場の意図的な設定(児童同士の関わりをもたせ、自分や友達のよさに気付かせる) ④児童会による「ニコニコふわふわ言葉大作戦」の実施	○学級満足度全国平均以上(1学期2学期ハイバーQU実施) ○「自分にはよいところがある」「よさを友達に認められている」肯定的評価児童の割合80%以上(8月2月児童アンケート)